

セルフ・ハンディキャッピングの研究動向

東京大学教育心理学研究室 伊 藤 忠 弘

Review of the Studies on Self-Handicapping

Tadahiro ITO

Since Jones & Berglas (1978) presented the conception of self-handicapping, a lot of empirical research on self-handicapping was reported. Some researchers drew a distinction between “acquired” (or “behavioral”) self-handicapping such as drug ingestion, alcohol consumption, effort reduction, and choosing a difficult task, and “claimed” (or “self-reported”) self-handicapping such as verbal claim to be ill, socially anxious, test anxious, or in a bad mood.

This paper reviewed these studies from three points of view : (a) the situational factors that elicit or inhibit self-handicapping, (b) the individual differences in self-handicapping behavior, (c) the effects of self-handicapping on its users and audiences.

目 次

- I. セルフ・ハンディキャッピングとは
- II. SHC の理論的展開と実証的研究
 - A. 社会心理学における SHC 成立の理論的背景
 - B. SHC の成立
 - C. SHC の初期の実証的研究
 - D. SHC 概念の拡張と一連の研究
 - E. SHC の個人差についての研究
 - F. SHC の分類
- III. SHC に影響を与える状況的要因
 - A. SHC を促進する要因
 - B. SHC を抑制する要因
- IV. SHC に影響を与えるパーソナリティ的要因
 - A. 心的症状報告の個人差に関する研究
 - B. Self-Handicapping Scale (SHS) に関する研究
 - C. 自尊心と SHC との関係
 - D. 公的自己意識と SHC の関係
 - E. 抑鬱と SHC の関係
 - F. SHC の性差に関する研究
- V. SHC が及ぼす影響に関する研究
 - A. SHC の行為者に及ぼす影響
 - B. SHC の観察者に及ぼす影響

I. セルフ・ハンディキャッピングとは

本論文の目的は、最近までのセルフ・ハンディキャッピング (self-handicapping ; 以下 SHC と略記) の研究結

果を整理し、紹介することである。SHC とは、自分の何らかの特性が評価の対象となる可能性があり、かつそこで高い評価を受けられるかどうか確信がもてないばあい、遂行を妨害するハンディキャップがあることを他者に主張したり、自らハンディキャップを作り出す行為をいう(安藤, 1990)。あらかじめ主張した、あるいは実際に作り出したハンディキャップのために、たとえ失敗した場合でも、失敗の原因がそのハンディキャップのせいにされるために、自分自身に対する否定的な影響を最小限に止めることができる。また、成功した場合には、ハンディキャップを乗り越えて成功したということで自分の能力の高さが割増されて推測されて、自己イメージの高揚につながる。

試合の前に、ケガによる練習不足をことさら周囲の人に強調しているテニス選手の例を考えてみよう。彼がその試合で負けてしまっても、負けた原因として、ケガによる練習不足を思い浮かべるため、実際に相手より実力が劣っていたかどうか曖昧となり、彼の自己イメージは傷つかない。また、もし彼が勝ったなら(実際に練習不足なら、これは非常に難しいことだが)、練習不足にもかかわらず勝ったということで、彼のテニスの実力は割増されて推測される。この他にも、頭は良いのに勉強をしようとしないうために成績の悪い少年、異性とつきあう良い機会があるのにそれを利用しようとしないう独身者、重要な試験の前の晩に十分な睡眠をとろうとしない学生などが、SHC 行為者の例と考えられる。

II. SHCの理論的展開と実証的研究

A. 社会心理学におけるSHC成立の理論的背景

社会心理学において、SHCは2つの理論的背景の上に登場してきた(Higgins, 1990)。1つは、Goffmanに代表される印象操作研究である。1960年代半ば以降、Braginskyら一連の研究者は、精神病患者が重要な個人的利得を獲得するために、自らの症状の呈示を操作していることを明らかにしていた。もう1つは、Heiderに始まる原因帰属研究である。彼の提唱した素朴心理学(naive psychology)は、それ以降の原因帰属の様々な理論(対応推論理論やANOVAモデル)に影響を与え、人が日常生活のなかで行っている対人知覚や因果推論の過程を明らかにしていった。さらに、1970年代に入って、帰属研究が原因帰属の体系的な歪み(self-serving bias)を扱うようになり、自尊心の維持や高揚といった動機によって影響を受ける認知や行動が注目されてきた。

B. SHCの成立

1975年にJonesとBerglasは、薬物使用者に特徴的な自己呈示行動について記述した。そのような行動は、人が帰属の原理に関する暗黙の知識を所持しているだけでなく、自分の行動についての帰属を形成するために、活発に(自分の行動を含めた)環境を操作することを意味しており、Jones & Berglas (1978)によって“self-handicapping”と名付けられた(Higgins, 1990)。Berglas & Jones (1978)は、SHCを“失敗を外在化し、成功を内在化する機会を高めるような行動や状況の選択”と定義している。自分の行動の結果が明確になった後に行われる利己的帰属(self-serving bias)とは異なり、SHCは、結果が明確になる前に自分の行動や周囲の環境を整えておくという先制的な言い訳行動である。また、Kelleyが提唱した割引・割増原理を積極的に利用しており、自分の行動に対してあらかじめ構成した妨害的要因(ハンディキャップ)のために、失敗した場合にはその原因が自分の能力の欠如にあるという推測が割引かれ、また成功した場合にはその原因が自分の能力にあるという推測が割増される。

SHCの最大の“矛盾”は、採用したハンディキャップのために実際の遂行の成功確率が低下することにある。SHC採用者は、達成よりもむしろ自我防衛に動機づけられているため、失敗が十分に説明され、成功が自尊心を高める限りにおいて、自ら進んで失敗を受け入れている(Higgins, 1990)。Jones & Berglas (1978)は、このよ

うなSHCの採用者を、“不安定だが、決してネガティブではない自己能力感を保持している”と特徴づけ、そのような自己概念が形成される発達過程についても言及している。

C. SHCの初期の実証的研究

SHCの実証的研究は、Berglas & Jones (1978)に始まる。その手続き(第一実験)は、以下のとおりである。

- ①被験者に、“薬を飲む条件と飲まない条件で難しい知的課題の遂行成績を比較して、知的遂行に薬が与える影響を調べる”という表向きの目的を教示する。
- ②随伴性の操作：薬を飲まない条件として第一課題(20問)がアシスタントによって施行される。非随伴的成功条件では、解答不能な問題16問と易しい問題4問を与え、16問正解の偽のフィードバックを与える。随伴的成功条件では、平均して12~14問程度正解が可能な問題を与え、正答数をそのままフィードバックする。両条件とも、今までで最も良い成績であることを教示する。
- ③publicityの操作：公的条件では、実験者は、被験者の目の前で、アシスタントから被験者の“成功”について報告を受ける。私的条件では、実験者は何も報告を受けない。
- ④従属変数の測定：第二課題の遂行の前に、被験者は自ら服用する薬物を、“Actavil”(課題遂行を促進すると教示された薬)、“Pandocrin”(課題を抑制すると教示された薬)と“Control”のなかから自由に選択する。

結果では、publicityの操作にかかわらず、非随伴的成功条件の被験者が、随伴的成功条件の被験者よりも“Pandocrin”を選択する傾向(すなわちSHC)が認められた。さらにこの傾向は、特に男性被験者において顕著であった。また、第二実験では、“成功”フィードバックがなされなければ(単に困難な問題に解答しただけでは)SHC傾向は生じないことが明らかにされ、非随伴的成功がSHC生起に必要であると主張された。

その後、同様の実験手続きによる研究は、薬物の代わりにアルコールを用いても同様の結果が認められること(Tucker, Vuchinich, & Sobell, 1981)、異なるpublicityの操作を用いると、薬物の選択が実験者に明らかになる場合にのみSHCが生じること(Kolditz & Arkin, 1982)を見出した。特にKolditz & Arkin(1982)は、SHCは自尊心維持の方略であるというよりはむしろ観察者に向けられた自己呈示戦略であるという主張を展開した。

D. SHC 概念の拡張と一連の研究

Snyder & Smith(1982) は, Adler の主張する心的症状の防衛的機能と SHC の概念を統合するように, SHC 概念を拡張した。Snyder らは, SHC を“その遂行いかんによって自分の能力の水準が明確になるような領域で, 不適切な遂行の結果, 自尊心が低下することが予想される場合, 何らかの問題や弱点, 欠陥があることを表面的には自ら認めるような特性・行動を採用する過程”と定義し(安藤, 1987), 非脅威的な現状を維持するための心的症状の戦略的呈示を, SHC として新たに含み入れた(Higgins, 1990)。

Smith, Snyder, & Handelsman(1982) は, 症状呈示型の SHC についての最初の研究を行った。Smith らは, テスト不安の高い人と低い人をそれぞれ 4 つの実験条件; ①課題の予備調査を行うとする条件(非評価条件), 知能テストのデータを集めるとする評価状況で, ②テスト不安が知能テストの遂行に悪影響を与えると教示する条件(評価-抑制条件), ③影響しないと教示する条件(評価-影響なし条件), ④特に教示を与えない条件(評価-教示なし条件)に振り分け, 第一課題では非常に難しい課題を遂行させた後, 第二課題の前に, 被験者の不安を報告させた。その結果, テスト不安高群では, “評価-教示なし条件”> “評価-遂行抑制条件”> “評価-影響なし条件”> “非評価条件”の順で不安が高かった。これに対して, テスト不安低群では, 4 条件間ではほとんど差異が認められなかった。この結果は, テスト不安の高い人が, 自分の能力が評価されるような状況で, SHC 方略として不安の報告を操作していることを支持している。この他にも SHC 方略として利用されている症状報告の例として, “現在の健康状態”(Smith, Snyder, & Perkins, 1983), “シャイネス”(Snyder, Smith, Augelli, & Ingram, 1985), “過去の外傷体験”(DeGree & Snyder, 1985) などが報告されている。

E. SHC の個人差についての研究

Jones & Berglas(1978) は, 薬物依存者やアルコール依存者, “underachiever”が SHC の使用者の典型例であると考えていた。また, Snyder らの一連の研究は, ある種の心的症状を持つ人が, その症状を SHC として利用していることを明らかにしていた。1982年に Jones と Rhodewalt によって作成された Self-Handicapping Scale (SHS) は, 様々な評価的状況での一般的な SHC 傾向の強さを, 直接的に評価することを目的としている(第 4 章参照; 項目は, Rhodewalt, 1990; 日本語版は, 沼崎・小口, 1990)。Rhodewalt, Saltzman, & Wittmer

(1984) は, 大学の水泳選手およびプロゴルファーに SHS を実施し, SHC 方略を採用する傾向の強い人と弱い人を選び出し, 重要な大会の前とそうでない大会の前の練習量とコンディションの報告を比較した。その結果, 重要な大会の前には, SHC 傾向の弱い人は練習量を増加させるのに対して, SHC 傾向の強い人は練習量を増加させなかった。また, SHC 傾向の強い人は, 重要な大会の前のコンディションを好ましくないと報告した。しかし, 実際の大会での成績では, 差異が認められなかった。

F. SHC の分類

Arkin & Baumgardner(1985) は, それまでの研究で報告されてきた SHC の形態を, ハンディキャップの位置が個人の内部にある(内的)か, 外部にある(外的)かという次元と, ハンディキャップが実際の行動として遂行される(acquired・遂行的)か, 言語的に主張される(claimed・主張的)かという次元によって分類した(表 1)。

表 1 SHC の分類 (Arkin & Baumgardner (1985) にしたがって分類) 行動の形態

	遂行的	主張的
ハンディキャップの位置	薬物の摂取	不安の主張 Smith et al.(1982) Greenberg et al.(1985)
	Berglas & Jones(1978)	
	Kolditz & Arkin(1982)	身体的不調の訴え Smith et al.(1983)
	アルコールの摂取	シャイネスの主張 Snyder et al.(1985)
	Tucker et al.(1981)	過去の外傷体験の報告
	Higgins & Harris(1988)	DeGree & Snyder(1985)
	Isleib et al.(1988)	ネガティブムードの報告
	努力の差し控え	Baumgardner(1991)
	Pyszczynski & Greenberg(1983)	Baumgardner et al.(1985)
	Rhodewalt et al.(1984)	身体的苦痛の報告
Tice & Baumeister(1990)	Mayerson & Rhodewalt(1988)	
外的	課題を妨害する音の選択	
	Rhodewalt & Davison(1986)	課題の妨害要因の報告
	Shepperd & Arkin(1989a,1989b)	Strube(1986)
	困難な目標の選択	Greenberg(1985)

また, Leary & Shepperd(1986) は, Berglas 型の実験によって扱われている SHC を行動的 (behavioral) SHC, Snyder 型の実験によって扱われている SHC を自己報告的 (self-reported) SHC と区別している。そして, 両者の最大の相違点として, 行動的 SHC が課題の成功確率を実質的に低下させるのに対して, 自己報告的 SHC は成功確率を低下させないことを挙げている。

Berglas も Berglas 型の SHC と Snyder 型の SHC の相違点について言及している (Higgins, 1990)。第 1 に, 被験者の経験が異なり, SHC を引き起こす動機づけに明らかな違いがある。Berglas 型の SHC では, 被験者は非随伴的成功を経験し, 最初の課題で得られた肯定的な自

己像を維持するために SHC 方略を採用する。これに対して、Snyder 型の SHC では、被験者は困難な問題にさらされ、否定的な自己像を避けるために自分の心的症状を呈示すると考えられる。第 2 に、SHC 使用の結果に違いがある。Berglas 型の SHC では、一時的に成功確率が下がるが、SHC 方略として採用する行動は自分にとって外的でコントロール可能な要因であり、期間も限定される。これに対して、Snyder 型の SHC では、自分にとって内的で安定している心的症状を SHC として利用するために、ハンディキャップが長期的な個人の属性に帰属され、最終的には他者から否定的な評価を受けかねないことになる。Berglas は、両者をはっきりと区別した上で、SHC の概念を Berglas 型の SHC に限定して使用すべきであると述べている。

III. SHC に影響を与える状況要因

A. SHC を促進する要因

1. 課題の自我関与度

Pyszczynski & Greenberg (1983) は、課題の自我関与度を操作することにより、SHC が自分にとって非常に重要な自己概念を防衛する方略であることを実証している。被験者は、高関与条件では、“このテストは信頼性が高く、学業的、職業的成功に対する予測性の高いものである”と教示されたのに対して、低関与条件では、“テストは標準化されておらず、その得点は十分な意味を持たない”と教示された。その結果、第一課題で難しい問題を与えられ、第二課題の自我関与が高い条件の被験者が、努力の低減を報告した。また、Shepperd & Arkin (1989a, 1989b) も同様の方法で自我関与度を操作し、重要な課題で SHC (妨害音の選択) が生じることを明らかにした。

Rhodewalt, Saltzman, & Wittmer (1984) は、セルフ・ハンディキャッピング・スケール (SHS) の得点の低い運動選手は、重要な試合の前には練習量が増えるのに対して、高い選手は、練習量が増加しない傾向を見出した。ここで重要なことは、高 SHS 群の方が低 SHS 群に比べ、これらの試合をより重要であると評定していることである。Jagacinski & Nicholls (1990) は、努力の低減の別解釈として、被験者が課題に対してコミットメントしていなかった可能性を挙げている。すなわち、与えられた課題において自分が有能でないことが明らかになる、あるいは明らかになることが予想されると、その課題に対するコミットメントが低下し、その結果として必然的に努力量が低下することが考えられる。しかし、Rhodewalt, Saltzman, & Wittmer (1984) の結果は、高

SHS の選手が、低 SHS の選手に比べて、試合自体を非常に重要であると評価しているにもかかわらず、練習量を増加させないことを明らかにしており、SHC 戦略が自己概念の特に重要な部分を防衛しようとするものであることを支持している。

2. 非随伴的成功経験

Berglas 型の遂行的 SHC の必要条件は、被験者に非随伴的成功を経験させることである (Berglas & Jones, 1978 ; Kolditz & Arkin, 1982 ; Higgins & Harris, 1988 ; Tucker, Vuchinich, & Sobell, 1981 ; Isleib, Vuchinich, & Tucker, 1988 ; Rhodewalt & Davison, 1986 ; Greenberg, 1985)。非随伴的成功とは、自分自身の行動とは全く無関係に生じる成功経験であり、実験操作としては、解答不能な問題や非常に困難な問題を解答させた後、実際の成績と無関係に成功フィードバックを与えることによって経験させている。また、フィードバックを与えずに単に解答不能な困難な問題を解答しただけでは遂行的 SHC は生じない (Berglas & Jones, 1978 ; Tucker, Vuchinich & Sobell, 1981 ; Higgins & Harris, 1988)。

これに対して、Smith, Snyder, & Handelsman (1982) に始まる一連の主張的 SHC 研究では、能力の評価の前に非常に解答困難な問題を与えられることによって、SHC が生じることが認められている (Smith, Snyder, & Perkins, 1983 ; Pyszczynski & Greenberg, 1983 ; Snyder, Smith, Augelli, & Ingram, 1985 ; DeGree & Snyder, 1985)。つまり、遂行的 SHC 研究と主張的 SHC 研究の実験操作上の違いは、非常に困難な問題に対する成功フィードバックの有無である。成功フィードバックがなくても、本来保持している肯定的な自己概念が将来の課題の失敗によって傷つけられるのを防ぐために SHC を採用することはありうるが、防衛すべき肯定的な自己概念をより積極的に作り出すという点で、非随伴的成功経験は SHC を生起させる操作としては強力であると思われる。実質的成功確率を下げるような遂行的 SHC は、非随伴的成功のような強力な要因によって初めて生じるのかもしれない。

失敗フィードバックを扱った研究も、いくつか行われている。Rhodewalt & Davison (1986) や Higgins & Harris (1988) は、“失敗”を経験した被験者が、非随伴的成功を経験した被験者と比べて、遂行的 SHC を採用する傾向の少ないことを見出している。また、Baumgardner, Lake, & Arkin (1985) は、第一課題の失敗が実験者に明らかでない場合 (私的條件) では、失敗が明らかでない場合 (公的條件) に比べ、課題に影響を与えると

教示されたネガティブなムードを高く報告することを見出し、Baumgardner(1991)は、この傾向が特に抑鬱者で認められることを確認している。

これまでのほとんどの研究で、フィードバックが実験者によってなされていることは、実験者が被験者の成功・失敗を知っていることを意味する。よって、非随伴的成功経験がSHCを生起させる要因として強力なのは、実験者が被験者に対して肯定的イメージを持っているため、実験者に対する自己呈示動機を高めたことによるという印象操作的解釈も可能である。失敗が非随伴的成功に比べSHCを生起しにくいのは、被験者の肯定的なイメージを実験者が持たないため、印象操作としてのSHCを採用する必要性が小さいからかもしれない。

3. 観察者の存在

SHCの生起する条件として他者の存在が必要かどうかということは、SHCの動機が自己評価の維持か、自己呈示かという問題として論議されてきた。Berglas & Jones(1978)は、実験者が第一課題での成功を知っているかどうかにかかわらず、非随伴的成功を経験した被験者が、課題遂行を抑制する薬物を選択する傾向を見出した。そして、SHCの最大の目標は、課題に対する能力やコントロールについての自分自身の帰属をコントロールすることであり、よって完全に私的な条件下においてもSHC行動を採用すると主張した。

これに対して、Kolditz & Arkin(1982)は、publicityの操作を変えてBerglas & Jones(1978)の追試を実施し、薬物選択が実験者に明らかにならない条件ではSHCが生じにくいことを見出した(薬物選択も第二課題の成績も私的な条件下では、抑制薬の選択者はいなかった)。そして、SHCは自分自身の能力帰属に影響を及ぼさないものではないが、ある条件下では少なくとも自己呈示的動機に基づいてSHC戦略が採用されていると結論づけた。

SHCを自己呈示と特徴づける主張は、実験者が第一課題の失敗を知っている条件ではSHCが生じないこと

(Baumgardner et al., 1985)、公的・私的意識の高い被験者がSHCを採用しやすいこと(Shepperd & Arkin, 1989b)、練習量を実験者が知ることができる条件で課題前の練習量が少ないこと(Tice & Baumeister, 1990)などによって支持されている。ただし、publicityの操作に違いはあるものの、私的な条件下においてSHCが生じる研究も報告されている(Greenberg, Pyszczynski, & Paisley, 1985; Arkin & Baumgardner 1985)。よって、観察者の存在はSHCを促進するけれども、自己呈示動機のみによってSHCが生じると結論づけることはでき

ない。

B. SHCを抑制する要因

1. 外的な報酬の存在

Greenberg, Pyszczynski, & Paisley(1985)は、課題の成功に対する報酬が多いときには、SHCとして不安を報告する傾向は認められないことを見出した。この不安の報告は私的状況で行われており、高報酬条件の被験者は、課題遂行が成功するように、自分は不安でないことと知覚するように動機づけられていたと解釈できる。このように、外的な報酬が十分に大きいときには、実際の遂行を妨げるような遂行的SHCだけでなく、行為者が課題遂行に影響を与えると信じている場合には主張的SHCも抑制される考えられる。

2. SHCの採用に伴う他者からの不承認の可能性

観察者の存在はSHCを促進する一要因である。しかし、積極的なSHCの採用は、観察者の否定的評価を導く可能性があるため(Springston & Chafe, 1987)、そのような危険性が顕著となる場合には、SHCは抑制されると考えられる(第5章参照)。

Smith, Snyder, & Handelsman(1982)は、不安が課題遂行を抑制すると明白に教示されると、特に何も教示されなかった場合と比べて、SHCが採用されにくいことを明らかにしている。そして、SHCの言い訳としての性質が明白に述べられた場合には、自己防衛的な言い訳の使用に対する公的・私的な関心が高められているためにSHCが抑制されると考察している。これ以降の主張的SHCの研究では、課題を抑制する症状の効果を明白に教示する群は実験に含まれていない。これに対して、これまでの遂行的SHC研究では、薬物やアルコール、ノイズといったハンディキャップ要因が課題遂行を抑制することが明白に述べられており、その上でのSHCが認められている。

遂行的SHCと主張的SHCの異なる結果については、2つの理由が考えられる。第1に、遂行的SHCは、その存在が明白であり、観察者を納得させることができる。これに対して、主張的SHCは、ハンディキャップが内的要因(不安など)であるために、観察者にはそれが本当に存在するかどうかは明らかではなく、ハンディキャップの存在が信用されにくい。主張的SHCにおいて、SHCの言い訳的性質が明白に述べられると、ハンディキャップの存在を観察者が疑い、かえって否定的な評価を招くかもしれないと予想されるため、SHC傾向が弱まると考えられる。第2に、遂行的SHC研究では、薬物の摂取自体の影響が研究対象であり、その選択について別の正当

な理由(“実験のため”という理由)が存在する(Berglas & Jones(1978)の研究では、抑制薬を選択した被験者のほとんどは、その理由を“実験者のため”と説明し、自己防衛的な理由を挙げたものはほとんどいなかった)。これに対して、主張的 SHC 研究では、心的症状の報告に対して他の正当な理由が存在しない。そのような場合には、自己防衛の動機が観察者に明らかになり否定的な評価を受けるかもしれないと予想されるため、SHC は抑制されると考えられる(Handelsman, Kraiger, & King, 1985)。

IV. SHC に影響を与えるパーソナリティ的要因

A. 心的症状報告の個人差に関する研究

全く普通の人でも身体的苦痛を SHC として利用するが(Mayerson & Rhodewalt, 1988), SHC としての心的症状の報告に個人差が存在していることは, Snyder らの一連の研究が明らかにしている。Smith et al.(1982)は、テスト不安の高い被験者が、自我関与の高い課題で、不安が課題遂行に対して影響を与えると信じている場合には、不安を高く報告する傾向を認めている。テスト不安の低い被験者では、このような傾向は認められなかった。同様の結果は、憂鬱症状(Smith, Snyder, & Perkins, 1983)と社会不安(Snyder, Smith, Augelli, & Ingram, 1985)の研究においても認められている。この結果から、テスト不安や社会不安、憂鬱症状を保持している人は、自己概念の防衛のために、SHC として自分の症状報告を調整しているように思われる。また、Smith et al.(1982)の研究は、テスト不安の高い被験者が、不安が課題遂行に影響を与えないと教示した場合には、不安が影響を与えると教示した場合よりも、課題に対する努力の低減を報告するという結果を見出している。テスト不安の低い被験者では、このような傾向は認められなかった。この結果は、課題遂行場面という非常に限定された状況ではあるが、不安が SHC としての機能を果たさなくなった場合に、努力の低減という異なる SHC 戦略によって補完したことを示しており、テスト不安の高い人が慢性的に SHC 戦略を使用している可能性を示唆している。

B. Self-Handicapping Scale(SHS) に関する研究

SHS は、評価状況と結びついた努力低減、病気、引き延ばし、情緒的混乱のような SHC 戦略の使用に関する 25 項目からなる尺度であり、十分な内的整合性 (α 係数 $r = .79$) と安定性(再検査法による信頼性係数 $r = .74$) を示している(Rhodewalt, 1990)。表 2 に挙げられているように、SHS は他者指向性、公的自己意識、社会不安

と正の相関があり、SHC が他者に対する自己呈示的動機から生じているという主張と一致している。しかし、Rhodewalt(1990)は、自尊心の影響を除いた場合には、公的自己意識および社会不安とは無相関になること、さらに社会的望ましさとは高い負の相関があることを指摘し、必ずしも SHC が自己呈示的動機だけによるものではないと主張している。また SHS の因子分析の結果は、第一因子として“言い訳傾向”、第二因子として“努力や動機への関心”を抽出しており、これを基に SHS の短縮版の作成も試みられている(Rhodewalt, 1990)。SHS の日本語版(沼崎・小口, 1990)では、再検査法による信頼性係数は .80、内的整合性は Cronbach の α 係数で .61 を示し、自尊心尺度とは負の相関が認められている。また因子分析の結果、統制可能性に関連した 2 因子を抽出し、第一因子を“やれない因子”、第二因子を“やらない因子”と命名している。

表 2 SHS と他の尺度との相関 (Rhodewalt (1990) より引用)

Janis & Field の自尊心尺度	-.43 / -.38 (-.37)
Crowne & Marlowe の社会的望ましさ尺度	-.43
Beck の抑鬱尺度 (BDI)	.43
自己意識尺度	
公的自己意識	.22 (.11)
私的自己意識	.09 (.14)
社会不安	.32 (.11)
セルフ・モニタリング尺度	
外交性	-.18 (-.17)
他者指向性	.36 (.26)
演技性	.00 (.05)

() 内は女性の相関

SHS が SHC 傾向を予測しうることを明らかにする研究もいくつか行われている (Strube, 1986 ; Strube & Roemmele, 1985 ; 沼崎・小口, 1990)。例えば、Rhodewalt, Saltzman, & Wittmer(1984)は、重要な大会の前には、SHS 得点の低い運動選手は練習量を増やすのに対して、得点の高い運動選手は練習量を増やさないことを見出している。また、Rhodewalt & Fairfield(1989)は、SHS 得点の高い被験者は、練習課題が難しかったときに、課題に対してあまり努力しないと報告することを見出している。双方の研究とも、SHS の得点の高い人が、試合や課題の重要度を高く回答しており、迫りつつある評価的事態を非常に重大に認知していて、なおかつ努力量を差し控えようとしていることを明らかにしている。

C. 自尊心と SHC との関係

1. 自尊心の高低

SHC 概念と自尊心概念は理論的には異なるものであり、SHS 作成においても自尊心との相関を極力小さくする努力が払われてきた (Rhodewalt, 1990)。しかし、実際には、SHS と自尊心尺度の間に非常に高い負の相関があることが認められている (Strube, 1986 ; Rhodewalt, 1990)。

自尊心と SHC 行動の関係を直接扱った研究は数少なく、しかもその結果は一貫していない。Harris & Snyder (1986) は、自尊心の高低と SHC 行動 (練習の差し控え) との関係を見出していない。これに対して、Tice & Baumeister (1990) は、高自尊心者が実験者の前で課題の練習を控えることを見出している。また Harris, Snyder, Higgins, & Schrag (1986) は、自尊心の高い女性およびテスト不安の高い女性が、課題の前に自己防衛的な帰属をすることを見出している。

2. 自己概念の安定性

Jones & Berglas (1978) は、SHC を“不安定だが、決してネガティブではない自己能力感”を防衛する手段として定義している。そして、被験者に与える非随伴的成功経験が、そのような自己能力感を実験状況で被験者に与える手段であると言える。Harris & Snyder (1986) は、自己概念の安定性の個人差を測定する方法として、自尊心尺度に yes-no の 2 件法で回答させた後、その回答に対する確信度を 5 段階で回答させた。この自己概念の安定性 (確信度) は、再検査法および析半法により高い信頼性が確かめられており ($r = .70$; $r = .84$)、自尊心とは無相関であった ($r = .05$)。そして、自尊心の高さに関係なく、自己概念の不安定な男性被験者が、テスト前の意図する努力量の報告も実際の練習量も少ないことを見出した。

D. 公的自己意識と SHC の関係

SHC を自己呈示的手段として考えると、他者の印象に対して非常に敏感な人が、SHC 行動を採用すると予想される。Shepperd & Arkin (1989b) は、公的自己意識の高い男性被験者が、自我関与課題を遂行する前に、SHC (課題を抑制する音楽の選択) を採用することを認めている。

E. 抑鬱と SHC の関係

Baumgardner (1991) は、ネガティブムードが影響するとした課題では、第一課題での成功を実験者が知っている場合と失敗を知らない場合の双方において、抑鬱者が

非抑鬱者よりもネガティブムードを多く報告することを見出した。この結果は、抑鬱者が自分自身の抑鬱徴候を SHC として採用している可能性を示唆するものであり、抑鬱者の示す抑鬱徴候が自己防衛のための戦略的自己呈示であるという主張を支持している。

F. SHC の性差に関する研究

Rhodewalt (1990) は、これまでに行われた 23 の SHC 研究を、被験者の性別という観点から整理している。女性被験者のみを用いた 7 件の研究は、すべて Snyder 型の主張的 SHC を扱っており、遂行的 SHC を扱った研究のほとんどは男性被験者によるものであった。女性が男性と同様に遂行的 SHC を採用することを認めた研究は 2 件のみである (Strube & Roemmele, 1985 ; Shepperd & Arkin, 1989a)。

性差を分析した 7 件のうち 5 件において、男性が女性よりも SHC 行動に従事しやすいことが報告されており、最近の研究でも Shepperd & Arkin (1989b) によって確認されている。7 件のうち 1 件 (Strube & Roemmele, 1985) では性差は認められず (Shepperd & Arkin, 1989a ; Baumgardner, 1991 も同様)、女性が男性よりも SHC (努力の低減) を採用しやすいという結果を見出しているのは 1 件 (Rhodewalt & Fairfield, 1989) のみである。全体としては、男性が女性よりも SHC (特に遂行的 SHC) を採用しやすいという傾向が認められている。この傾向は帰属スタイルの性差によるものかもしれない (Berglas & Jones, 1978)。男性は非随伴的成功を能力に帰属するため、次課題での遂行の不確かさが能力に対する脅威となり SHC を採用するのに対し、女性は成功を外的要因に帰属しやすいため、次課題での遂行に対する脅威がなく SHC を採用しにくいと考えられる。

V. SHC が及ぼす影響に関する研究

A. SHC の行為者自身に及ぼす影響

1. 自尊心・感情反応

SHC の使用が自尊心の維持に効果的であることを直接検証した研究はあまりないが (Snyder, 1990)、少数の研究はその主張を支持している (Rhodewalt, Morf, Hazlett, Fairfield, 1991)。Isleib et al. (1988) は、課題前にアルコールであると教示されたものを飲んだ被験者は、教示されなかったものを飲んだ被験者に比べて、課題後に高い自尊心を示すことを明らかにした。また、Harris & Snyder (1986) は、自己概念の不安定な男性は、課題前の SHC (努力の差し控え) によって、課題遂行中

の不安が低下することを見出している。

2. 能力感・コントロール感の維持

Rhodewalt & Davison(1986) は、失敗経験の後、次課題遂行のために抑制音を選択した被験者は、促進音を選択した被験者に比べ、最初の課題の失敗を努力不足に帰属し、最初の結果が自分のコントロール下にあると報告することを見出している。Mayerson & Rhodewalt (1988) は、SHCを採用(冷水の苦痛の報告)して課題に失敗した被験者は、SHCを採用せずに失敗した被験者に比べて、失敗を苦痛に帰属し、能力に帰属しなかった。また、Greenberg et al.(1985) は、SHCを採用した高テスト不安者は、課題中の認知的干渉を報告しないことを見出している。これらの結果は、SHCが能力感・コントロール感の維持をもたらすことを支持している。さらにRhodewalt et al.(1991) は、SHCによる能力帰属の割増・割引の傾向に個人差が存在し、高自尊心-高SHSの被験者が最もSHCによる能力帰属の割増・割引を示すことを明らかにしている。

3. パフォーマンス

SHCは課題遂行を低下させると予想されるが、研究結果は一貫していない(Snyder, 1990)。Smith et al.(1982) は、テスト不安の高い人は課題の前にSHCとして不安を報告することを見出したが、実際の課題遂行については差を見出さなかった(Greenberg et al., 1985も同様)。Harris & Snyder(1986) は、自己概念が不確実な男性被験者が知的課題の前に努力を差し控えることを見出しているが、同様に実際の課題遂行には差異を見出していない。Rhodewalt et al.(1984) の第二実験では、SHSの得点の高いプロゴルファーは、得点の低いプロゴルファーよりも練習量が少ないことを見出しているが、シーズン後の成績は良いことを明らかにしている。さらに、Rhodewalt & Davison(1986) は、第一課題で失敗した後、第二課題で抑制音を選択し聴いていると信じた被験者は、促進音を選択し聴いていると信じた被験者よりも、実際の第二課題の成績が良いことを見出した。これらの結果は、主張的SHCはもとより、努力の差し控えのような遂行的SHCでさえ、必ずしもパフォーマンスの低下を導くとは限らないことを示している。

B. SHCの観察者に及ぼす影響

Springston & Chafe(1987) は、被験者にテスト遂行に失敗した3人の登場人物について、様々な次元で判断を求めた(Snyder, 1990)。1人は遂行以前のハンディキャップがなく(SHCなし条件)、1人は偶然にハンディキャップが与えられ(偶発的SHC条件)、1人は自分か

らハンディキャップを作り出している(自発的SHC条件)と描写されている。例えば、重要な試験を翌日に控えた主人公が、SHCなし条件では睡眠を十分にとり、偶発的SHC条件では思いもかけずやってきた訪問客を夜遅くまでもてなし、自発的SHC条件では自ら友人を呼んでパーティーを開くといったシナリオが与えられる。

能力推定においては、両方のSHC条件の主人公は、SHCなし条件に比べて、テスト成績に能力が反映されておらず、有能であると判断された。しかし、感情反応では、自発的SHC条件の主人公を他の2条件よりも嫌う傾向が認められ、さらに“将来的にどの程度成功するか”を尋ねた質問でも、自発的SHC条件の主人公は他の条件よりも成功しないと知覚していた。この結果は、SHCの観察者は、意図的に明白にSHCを採用する人物に対して、否定的な感情を持ち、長期的には能力が低いと判断することを示している。

SHC採用者が非好意的に認知されることは他の研究でも認められており(沼崎・和田, 1990; Smith & Strube, 1991)、あまりに意図的なSHCの採用は、その行為者が意図する印象操作的な機能を果たさないばかりか、逆に行為者に対するネガティブなイメージを形成される危険性を含んでいると言える(第3章参照)。

また、Smith & Strube(1991) は、観察者の個人差に注目して、低自尊心-低SHSの観察者がSHCの影響を最も受けやすいことを見出している。

付記

本論文は1990年度修士学位論文の一部に基づいています。本論文作成にあたりご指導いただきました井上健治教授に感謝いたします。

(指導教官 井上健治教授)

引用文献

- 安藤清志 1987 帰属過程と「自己」対人行動学研究, 6, 21-34.
 安藤清志 1990 「自己の姿の表出」の段階 中村陽吉(編)「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会 pp.143-198.
 Arkin, R. M., & Baumgardner, A. H. 1985 Self-handicapping. In J.H.Harvey & G. Weary(Eds.), *Attribution: Basic issues and applications*. New York: Academic Press. pp.169-202.
 Baumgardner, A. H. 1991 Claiming depressive symptoms as a self-handicap: A protective self-presentation strategy. *Basic and Applied Social Psychology*, 12, 97-113.
 Baumgardner, A. H., Lake, E. A., & Arkin, R. M. 1985 Claiming mood as a self-handicap: The influence of spoiled and unspoiled public identities. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 11, 349-357.

- Berglas, S., & Jones, E. E. 1978 Drug choice as a self-handicapping strategy in response to noncontingent success. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 405-417.
- DeGree, C. E., & Snyder, C. R. 1985 Adler's psychology (of use) today : Personal history of traumatic life events as self-handicapping strategy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 1512-1519.
- Greenberg, J. 1985 Unattainable goal choice as self-handicapping strategy. *Journal of Applied Social Psychology*, **15**, 140-152.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Paisley, C. 1985 Effect of extrinsic incentives on use of test anxiety as an anticipatory attributional defense : Playing it cool when the stakes are high. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 1136-1145.
- Handelsman, M. M., Kraiger, K., & King, C. S. 1985 Self-handicapping by task choice : An attribute ambiguity analysis. Paper presented at the meeting of the Rocky Mountain Psychological Association, Tucson, AZ.
- Harris, R. N., & Snyder, C. R. 1986 The role of uncertain self-esteem in self-handicapping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 451-458.
- Harris, R. N., Snyder, C. R., Higgins, R. L., & Schrag, J. L. 1986 Enhancing the prediction of self-handicapping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1191-1199.
- Higgins, R. L. 1990 Self-handicapping : Historical roots and contemporary branches. In R. L. Higgins, C. R. Snyder, & S. Berglas (Eds.), *Self-handicapping : The paradox that isn't*. New York : Plenum. pp. 1-36.
- Higgins, R. L., & Harris, R. N. 1988 Strategic "alcohol" use : Drinking to self-handicap. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **6**, 191-202.
- Isleib, R. A., Vuchinich, R. E., & Tucker, J. A. 1988 Performance attributions and changes in self-esteem following self-handicapping with alcohol consumption. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **6**, 88-103.
- Jagacinski, C. M., & Nicholls, J. G. 1990 Reducing effort to protect perceived ability : "They'd do it but I wouldn't". *Journal of Educational Psychology*, **82**, 15-21.
- Jones, E. E., & Berglas, S. 1978 Control of attributions about the self through self-handicapping strategies : The appeal of alcohol and the role of underachievement. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **4**, 200-206.
- Kolditz, T. A., & Arkin, R. M. 1982 An impression management interpretation of the self-handicapping strategy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 492-502.
- Leary, M. R., & Shepperd, J. A. 1986 Behavioral self-handicaps versus self-reported handicaps : A conceptual note. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1265-1268.
- Mayerson, N. H., & Rhodewalt, F. 1988 Role of self-protective attributions in the experience of pain. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **6**, 203-218.
- 沼崎誠・小口孝司 1990 大学生のセルフ・ハンディキャッピングの2次元 社会心理学研究, **5**, 42-49.
- 沼崎誠・和田万紀 1990 "いいわけ"が受け手に与える印象—セルフ・ハンディキャッピング的"いいわけ"—日本心理学会第54回大会発表論文集, 159.
- Pyszczynski, T., & Greenberg, J. 1983 Determinants of reduction in intended effort as a strategy for coping with anticipated failure. *Journal of Research in Personality*, **14**, 412-422.
- Rhodewalt, F. 1990 Self-handicappers : Individual differences in the preference for anticipatory, self-protective acts. In R. L. Higgins, C. R. Snyder, & S. Berglas (Eds.), *Self-handicapping : The paradox that isn't*. New York : Plenum. pp.59-106.
- Rhodewalt, F., & Davison, J. Jr. 1986 Self-handicapping and subsequent performance : Role of outcome valence and attributional certainty. *Basic and Applied Social Psychology*, **7**, 307-322.
- Rhodewalt, F., & Fairfield, M. L. 1989 Climed self-handicaps and the self-handicapper : The effects of reduction in intended effort on performance. Manuscript submitted for publication. University of Utah, Salt Lake City.
- Rhodewalt, F., Saltzman, A. T., & Wittmer, J. 1984 Self-handicapping among competitive athletes : The role of practice in self-esteem protection. *Basic and Applied Social Psychology*, **5**, 197-210.
- Rhodewalt, F., Morf, C., Hazlett, S., & Fairfield, M. 1991 Self-handicapping : The role of discounting and augmentation in the preservation of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 122-131.
- Shepperd, J. A., & Arkin, R. M. 1989a Determinants of self-handicapping : Task importance and the effects of preexisting handicaps on self-generated handicaps. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **15**, 102-112.
- Shepperd, J. A., & Arkin, R. M. 1989b Self-handicapping : The moderating roles of public self-consciousness and task importance. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **15**, 252-265.
- Smith, D. S., & Strube, M. J. 1991 Self-protective tendencies as moderators of self-handicapping impressions. *Basic and Applied Social Psychology*, **12**, 63-80.
- Smirh, T. W., Snyder, C. R., & Handelsman, M. M. 1982 On the self-serving function of an academic wooden leg : Test anxiety as a self-handicapping strategy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 314-321.
- Smith, T. W., Snyder, C. R., & Perkins, S. C. 1983 On the self-serving function of hypochondriacal complaints : Physical symptoms as self-handicapping strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 787-797.
- Snyder, C. R. 1990 Self-handicapping processes and sequelae : On the taking of a psychological dive. In R. L. Higgins, C. R. Snyder, & S. Berglas (Eds.), *Self-handicapping : The paradox that isn't*. New York : Plenum. pp. 107-150.
- Snyder, C. R., & Smith, T. W. 1982 Symptoms as self-handicapping strategies : The virtues of old wine in a new bottle. In G. Weary & H. L. Mirels (Eds.), *Integrations of clinical and social psychology*. New York : Oxford University Press. pp.104-127.
- Snyder, C. R., Smith, T. W., Augelli, R. W., & Ingram, R. E. 1985 On the self-serving function of social anxiety : Shyness as a self-handicapping strategy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 970-980.
- Springston, F. J., & Chafe, P. M. 1987 Impressions of fictional protagonists exhibiting self-handicapping behaviors. Paper presented at the meeting of the Canadian Psychological Association, Vancouver, B. C.
- Strube, M. J., 1986 An analysis of the self-handicapping scale. *Basic and Applied Social Psychology*, **7**, 211-224.
- Strube, M. J., & Roemmele, L. A. 1985 Self-evaluative task choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 981-993.
- Tice, D. M., & Baumeister, R. F. 1990 Self-esteem, self-handicapping, and self-presentation : The strategy of Inade-

- quate practice. *Journal of Personality*, 58, 443-464.
- Tucker, J. A., Vuchinich, R. E., & Sobell, M. B. 1981 Alcohol consumption as a self-handicapping strategy. *Journal of Abnormal Psychology*, 90, 220-230.